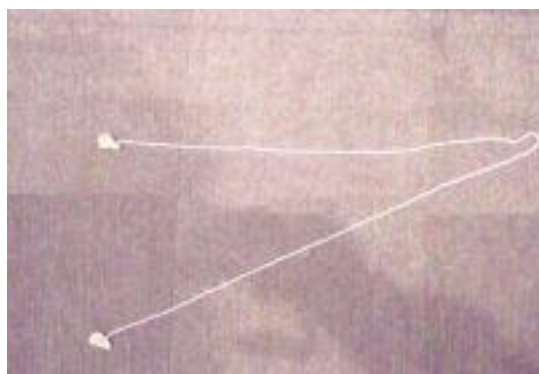


ートンボ捕りの思い出ー

(記・写真 岡本)

トンボ(蜻蛉)捕りは、我々世代にとって楽しい思い出である。いろいろな捕り方があってトンボの種類によって変えていた。シオカラトンボ、赤トンボなど池の端や草むらにいて低空を飛んでいるトンボは捕虫網でも捕りやすかった。トンボ中のトンボ、誰もが捕りたいトンボの王様級のオニヤンマ、ギンヤンマを捕るのは、難しい。数が少なく高く10m位の上空を急速飛行するので捕虫網では滅多に捕れない。山陰地方の田舎に住む従兄から夏休みに教えてもらった捕り方が懐かしく思い出される。トンボの体に絡みつく飛び道具を使うのだ。

飛び道具作りには、凧糸(1.5mほど)、重しにする丸い小石2こ(直径1cmほど)、小石を包む布またはキャラメルの包み紙2枚を準備する。作り方は簡単で、糸の両端に布または紙で包んだ石を結びつけるだけである。



ヤンマは野原、河原などの原っぱで小さな飛翔昆虫を捕らえようと、縄張りにする空間を往復飛行していることが多い。ギンヤンマは夕方によく飛んでいる。飛行するヤンマの目前に石を投げ上げると、餌と思って寄ってきたヤンマの翅に石付糸が絡んで、サラサラと乾いた気分の良い翅音をたてて落下してくる。言うは易いが、石を実際に絡ませるには相当な熟練を要する。

トンボが飛行する高さより石を高く投げ上げて、落下してくる石が飛行するヤンマの目前3mあたりに落ちるようにする。すると、石がトンボの視野に入り餌と錯覚して飛びつくと、2個の石を繋ぐ山なりになった糸が翅に絡みつく。うまく捕るには、幾つかの要領になれる必要がある。まず、2個の石が団子になって、くっついて落ちれば翅に絡まない。石が50cmほどの間隔を保って落下させないと駄目である。落下してくる石に絡ませるのだから、トンボが飛行する高さ以上に投げ上げて、さらに落下する石がトンボの視界に入り、飛びつける距離の3mほど前に落とさなければならぬ。これら全てを満足させるには、熟練技が必要であり、それには練習を要する。

左手の親指、人差し指、中指の3本で2個の石を摘み、二つ折りにした糸の先を右手の親指と人差し指で摘む。右手に糸、左手に石、その間の長さは、1.5mの半分75cmほどである。右手を先に左手を少し遅らせるタイミングで、石の重さで反動をつけて右手を半円を描くように振り上げ、右手が真上に来た時に放つ。振り子のように反動をつけないと石を高く投げ上げられない。距離を保った2個の石がヤンマの目前3mあたりに落ちてくるようにするには、職人のように熟練しなければならない。失敗を重ねても止めることなく、投げ続けて練習しておれば、今年の夏は駄目でも、来年は成功してヤンマが捕れるようになる。やり抜くことだ。この方法でヤンマが一匹でも捕れれば、天にも上る満足感、喜びを味わえるのだ。友達にも誇れるのだ。

このように子供の遊びにおいても熟練を要する遊びがあって、その上手、下手の差は当然に子供の間で生じる。遊びの技に優れた者は、仲間の間で一目置かれる。学校の勉強がそれほど出来なくても、遊びの世界で優秀、熟練の子供がいる。試験の成績が少々悪くても、遊びの世界で優秀な方が子供仲間では、威張れたものだ。遊びで仲間から評価されるために、情熱を持って練習

を繰り返し、努力する。その中でやり抜く精神力、意思力を培っていった。中学生頃になって勉強しなければならないと自覚し始めると、小学生時代に勉強しなかった子供が遊びで培った力を勉強に注ぎ始めて成果をあげていくことになる。遊びに元気いっぱいだった子供がやり抜く力で伸びていくことになる。



トンボ捕りには、他に「とりもち竿」「トンボ釣り」の方法があった。とりもち(注)竿は、2~3mの笹竹の先端から30cmほどにとりもち(駄菓子屋に売っていた)を塗ったものである。竿の片方の端を持った手首を左右に小刻みに素早く振ると、とりもちの部分に左右に振れて、とりもちの平面ができる。その面をトンボに近づけて、くっ付かせるのである。竿を左右に振ってとりもちの面を作るのがポイントである。竿を刀の

ように振っても駄目だ。トンボ釣りは、細い竹竿に結んだ糸の片方に生きたメスを括って飛ばす。竿を回して丸く円を描くように飛ばすとオスが絡んでくるという方法である。とりもち竿とトンボ釣りにもトンボの生態、飛行の観察から捻出した要領が必要であった。

(注)とりもち もちの木などの皮から取った粘り気のあるガムのような物質で小鳥や昆虫捕りに用いた。